Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-01

# アンリ・ルソー作品における月の表象 : 《眠るジプシー女》を手掛かりにした一考察

橋本, 恵里

(Citation)
美術史論集,19:99-112

(Issue Date)
2019-02-22

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041799

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041799

# アンリ・ルソー作品における月の表象
## ―《眠るジプシー女》を手掛かりにした一考察―

《キーワード》異国趣味　フランス近代美術

橋本恵里

### はじめに

様々なグループ運動が展開したフランス近代美術の中で、アンリ・ルソー（一八四四―一九一〇）はどの運動にも属することなく作品を制作・発表し続け、美術史上で特異な位置を占めるに至った。そんな彼の代表作を挙げるとするならば、それは晩年に精力的に描かれた一連の異国風景画と言えるだろう。画面いっぱいに広がる熱帯雨林、そしてその中で自由に振舞う動物たちをルソーは描いた。それらはゴーガンの場合と同じように、異国に対する当時の人々の憧憬の念が具現したものである。

ルソーの作品のいくつかは、これまでの研究の深化の過程で、他の作家の作品や新聞挿絵などから構図を引用したことが明らかとなっており[1]、そのこともあって個々の作品分析については、制作の霊感源つまりイメージソースの探求が積極的に行なわれてきた。その傾向が強く見られる例が、《眠るジプシー女》（図1、ニューヨーク近代美術館蔵）である。本作は一八九七年四月、第十三回アンデパンダン展にて発表され、当時はルソーの他作品と同様、観客や保守的な批評家から無理解の憂き目にあったが、今日では彼の最も成功した作品の一つとして数えられている。本作は描かれたモチーフの数がごくわずかで、構図が極めて単純なこともあり、複数の研究者が考えられうるイメージソースをそれぞれ提示してきた[2]。

しかし、作品に対して多面的な角度からみた考察や画歴においての位置付けに関しては、必ずしも十分になされてきたとは言えないため、筆者が本作の位置付けについて探ったところ、その過程で先行研究では触れられていない新たなテーマに立ち会った。それは、ルソーの作品における「月」のモチーフの象徴的意味合いである。彼の作品の中で月は、パリ近郊の風景画および異国風景画においてしばしば描き込まれているモチーフであり、後ほど詳述するが《眠るジプシー女》では作品の世界観にとって不可欠な存在となっている。本論では、《眠るジプシー女》および月が描かれた他のルソー

作品を概観して、画家が月というモチーフにどのような役割を作品の中で担わせていたかについて考察する。また、モチーフに与えられたイメージの実態をより深く探るために、当時の文芸や大衆紙などが月をどのように描写したかについても例を挙げて確認する。これらの考察を行なうことで、ルソーの異国風景画において月のモチーフは、単なる情景の一つの要素というだけに留まらず、描かれた物語内容の性質と結びついており、作品を読み解くうえで重要な目印になっているということを本論で主張する。[3]

## 一　《眠るジプシー女》における月の役割

《眠るジプシー女》は、ルソーの作品の中では大きなサイズ（縦一二九・五センチ×横二〇〇・七センチ）のものである。作者はそれだけ作品の仕上がりに自信を持っていたようで、本作をアンデパンダン展で発表した翌年の一八九八年に生まれ故郷のフランス北西部ラヴァル市の市長宛てに買い上げ依頼の手紙（七月一〇日付）を送付したが、その願いは成就しなかった。[4] 購入を依頼するにあたり、ルソーは手紙の中で本作がどのような場面を描いたものなのか丁寧に説明を施している。作品内容に関する記述を引用しよう。

一人の放浪の黒人女が、マンドリンと水差し（飲み水の入っている壺）を傍らにして、くたびれ切って眠りこんでいます。ライオンが通りかかって、匂いをかぐのですが、食べはしません。それは、とても詩的な月のせいなのです。舞台は、荒涼とした砂漠で、ジプシー女は、オリエント風の服装をしています。私はこの作品を一八〇〇から二〇〇〇フランでお譲りします。というのも、ラヴァル市が一人の出身者の思い出を持っていただけたら嬉しいからです。（岡谷公二訳。傍線部は筆者）[5]

ちなみにルソーは、本作を発表したアンデパンダン展においても来場者のために、絵の内容を簡潔に説明するキャプションを作っている。その記述は次の通りである。

その猫科の動物は、獰猛さにも拘わらず、獲物へと突進するのをためらっている。その獲物は、疲れてへとへとになっており、深い眠りについている[6]

何か特定のテクストを下敷きにしたような内容だが、未だ詳しいことは分かっておらず、ルソーの想像力によって生み出された物語として認識されている。

二つの説明文を比較すると、ジプシー女が眠りについていることとライオンが彼女を食べようとしないことは共通しているが、市長宛ての手紙では他の各モチーフについても触れており、作品の物語性を具体的に伝えようとしていることが分かる。かつ、この手紙で注目すべき点は、ライオンによる捕食が起きない理由を挙げていることだろう。その理由をルソーは、「とても詩的な月のせい」だと

している。この記述は原文では、C'est un effet de lune, très poétique となるが[7]、文の一部を強調するときに用いる強調構文が用いられており、ルソーが「月の影響」を強く主張していることが分かる。つまり、本作に描かれた物語を成立させるために、ルソーは月がもたらす影響力を口実として採用し、手紙の説明文からは、前景のジプシー女やライオンだけではなく、月にも観賞者の注意を向けさせようという意図が読み取られる。

異国趣味という主題で見れば、《眠るジプシー女》と晩年に集中して制作された密林の風景画とを大きなカテゴリーの中で結びつけることはできるだろう。それでは果たして、後者の異国風景画で描かれている月は、《眠るジプシー女》の場合と同じように作品の世界観にとって重要なモチーフとして扱われているのだろうか。ここからは主に異国風景画の作品比較を行ないながら、この点について考察する。

## 二　異国風景画における月と天体

密林を描いたルソーの異国風景画は[8]、確認できる最初の作品が《不意打ち！》（図2、一八九一年）であるが、それから七年間ほど同様の主題は制作されず、一九〇五年に発表した《飢えたライオン》（図3、一八九八／一九〇五年）が成功を収めてから精力的に制作が行なわれた。その中で月とわかるモチーフが描かれた作品を挙げると、《ライオンのいるジャングル》（図4、一九〇四年）、《蛇使い》（図5、一九〇七年）、《エデンの園のエヴァ》（図6、一九〇六―一九一〇年頃）、《夢》（図7、一九一〇年）となる[9]。三日月の例は無く、全て満月であるのが特徴であろう。

それらの満月は《眠るジプシー女》と同じように作品の世界観にとって重要な役割をもっているのか。筆者の考えを先に述べると、それらで繰り返し描かれた満月は「動物の野蛮な闘争性を鎮め、平和をもたらす」という性質を帯びていると推測する。このことを確認していくにあたり、まずは《眠るジプシー女》、そして先述した異国風景画の計五作品で共通するモチーフを挙げ、描かれた内容について確認する。各作品で繰り返し登場するモチーフは主に次の三つである。

① 野生動物―《エデンの園のエヴァ》以外の四作品で描かれている。

② 女性像―《ライオンのいるジャングル》以外の四作品で描かれている。《眠るジプシー女》ではジプシー女、《蛇使い》では蛇使いの黒人女性、《夢》では椅子にもたれた裸婦（ヤドヴィガ）、《エデンの園のエヴァ》では中央のエヴァである。

③ 楽器のモチーフ―《眠るジプシー女》、《蛇使い》、《夢》で描かれている。《蛇使い》と《夢》に登場する蛇使いは笛を演奏しており、《眠るジプシー女》ではマンドリンが描かれている[10]。

これらのモチーフは、ルソーが書き記した《眠るジプシー女》の購入依頼の手紙にあった解説でも触れられている通りである。そし

て、その手紙と同様に手掛かりになるのが、ルソーが《夢》に付した作品解説である。ルソーは一九一〇年三月のアンデパンダン展に出品した《夢》に《眠るジプシー女》の時と同じく、キャプションを添えた。書かれた内容は次の通りである。

心地よく眠りこんだヤドヴィガは美しい夢の中で考え深げな蛇使いの吹く笛の音をきいた　月が花々や緑の木々を照らすあいだ　野獣や他の動物たちもその陽気な音色に耳を傾ける（岡谷公二訳。傍線部は筆者）[11]

ここでも先に指摘した、野生動物・女性像・楽器の三つのモチーフが説明の中で触れられているのが分かる。そして、月のモチーフにも言及しているが、ここでは「月が植物を照らしている」という意味の記述で済まされている。しかし、改めて考えてみると、仮にこの月についての記述がなくても、「夢の中でヤドヴィガは蛇使いの笛の音をきいた」ということと、「動物たちも音色に耳を傾ける」という二つの説明のみで絵の解説は成り立つように思える。つまり、この短い解説の中にわざわざ月光のことが記述されているのは、作者が絵画世界の大切な要素の一つとしてそれをみなしていたからだろう。この記述によって鑑賞者は、月光が密林に降り注ぐ様を想像するよう促される。

《夢》に付された解説を確認したが、ここからは《眠るジプシー女》で明示された「動物の獰猛生を鎮める月の効果」が他の四作品においても表れているかについて、制作順に沿って確認していこう。《ライオンのいるジャングル》は描かれているのが密林と月とライオンのみだが、静寂な雰囲気で満ちており、ライオンがこれから狩りを行なうような気配はあまり感じられない。同じように密林の中に単体の動物がいる《不意打ち！》とは雰囲気が大きく異なる。本作では、複雑に交錯する樹木の葉の間に月が描かれているが、月に木の葉が重ならないように配慮されているのが一目でわかる。月光によってもたらされる静寂さにライオンが大人しく身を落ち着けている、といった印象である。

次の《蛇使い》でも、画面を静かに満たす明るさは、無数の星が散らばる空に浮かぶ月から放たれている。様々な動物がいるが、「蛇使い」の笛の音によって、蛇達は大人しい様子でいる。描写のされ方を見ると、植物は色の濃淡の使われ方、動物たちは輪郭部分の明るさや蛇の体の陰影のつけ方などから、月光が十分に降り注いでいる様が確認できる。空間の静寂さと月光が溶けあったような場面である。

《夢》では、《蛇使い》よりも植物の密度が一層増しているが、「月が花々や緑の木々を照らしている」ため、画面には均一な明るさがある。植物は《蛇使い》と同様に、月の位置を考慮して光を受ける側が明るい色調で描き分けられている。また、ヤドヴィガという名の裸婦についても、陰影がはっきりと表現されており、空から射す光の存在を感じさせる一因になっている。加えて、この作品はヤドヴィガの夢の中という設定が前提にあるが、女性と野生動物との組

み合わせという点は《眠るジプシー女》と共通している。ライオンなど危険な動物が女性のすぐ身近にいるが、動物たちは蛇使いの音色に耳を傾けており、彼女に飛びかかる気配はない。動物を前にして本来なら危険な状況であるにもかかわらず、女性の身の安全が確保されているという点で《眠るジプシー女》と《夢》は共通しているといえる。

最後に《エデンの園のエヴァ》を見ると、本作では野生動物は姿を見せていないが、題名に明らかなように、密林の舞台そのものが「エデンの園」として捉えられている。中央にたたずむエヴァ、彼女を取り囲むように繁茂する密林を、空に浮かぶ巨大な満月が照らし出している。本作は、異国の密林が作者にとって楽園の舞台になりえることを明瞭に示す例である。そして、主役であるエヴァの上に、光源の役割をもつ満月をひときわ大きく描いている点に着目すると、ルソーが月のモチーフを特別視していたことが分かるだろう。

以上、月が描かれた異国風景画について確認したが、いずれにおいても月光の存在が、それぞれのモチーフの表現に反映されているのが分かる。陰影の施し方、そしてモチーフの輪郭線を明るく浮かび上がらせる手法が、空から射す光を感じさせている。《眠るジプシー女》でルソーが言及した「月の影響」は、この描き方の点からすれば、四作品においてもひそかに表現されているように思われる。実際、各作品に登場する野生動物は、本来の獰猛さを忘れて危害を与えない状態として描かれている。このことから、月は空間に光を投じるという名目以外に、その光によって動物の闘争性を鎮めるという役割をも担わされていると考えられないだろうか。作品単体で見ると、月は一見、重要度が分かりにくいが、繰り返し描かれている事実から、作者がこのモチーフに一種のこだわりを持っていたことが窺い知れる。現実の自然界では不可能な事象を展開できる神秘的な世界、つまりルソーが考える異国の楽園を支えるにあたり、月光は特別な表象として描かれていると考えられる。

異国風景画に描かれた月については前述した通りだが、ルソーが表した密林風景は先の四作品のように平和な場面ばかりではない。残酷な弱肉強食の世界を描いたものも複数あり、興味深いことにこれらの作品には、満月の代わりに、赤い天体のモチーフが用いられているのに気づく。この赤い天体は、パリ郊外の風景画には登場せず、異国風景画においてのみ描かれている。特に、猛獣による捕食や闘いの場面を表した作品に目立つ形で描かれている。そのことから、赤い天体は、月と正反対に野生動物の闘争性を煽る性質を付与されているのではないかと考えられる。このモチーフが描かれた作品を挙げると、《飢えたライオン》、《異国風景》（図8、一九〇八年）、《処女林の落日》（図9、一九一〇年）、《ゴリラとインディオの戦う風景》（図10、一九一〇年）となる。《飢えたライオン》と《異国風景》の天体は前面に植物の葉が重なっているが、ほか二点では丸い形が明瞭に描かれて目を引くモチーフの一つとなっている。《異国風景》は、ここで挙げた作品の中では例外的に動物たちの楽しげな様子が描かれているが、背景にある天体は前景の果物と同じ円形で表現されており、画面にリズムを生み出すための構図上の工夫で描

かれたという側面があるだろう。ほかの三点についてはいずれも全て、闘争的な場面が表されている。

赤い天体が何を指し示すのかについて、はじめに参考となるのが《飢えたライオン》に付された作者による作品解説である。ルソーは本作を一九〇五年のサロン・ドートンヌに出品した際、キャプションで次のように説明した。

飢えたライオンは、カモシカに襲いかかり、むさぼり食う。ヒョウはその分け前を期待して待っている。猛禽はそれぞれ、涙を流す哀れな獣から肉片を食いちぎる。陽が沈む（岡谷公二訳）[12]

描かれた悲惨な状況を伝えており、最後の一文からは、空に浮かぶ赤い天体が日没を示していると分かる。

《処女林の落日》、《ゴリラとインディオの戦う風景》についても、人間と動物との間の生命をかけた争いがテーマになっているのは明らかである。《飢えたライオン》を含めたこれら三作品において、下界の惨劇を見守るように空中に浮かぶ日没のモチーフが、画面の不穏な雰囲気をより一層強いものにしていると言えるだろう。

青白い満月が明瞭に描かれているときは穏やかな情景であったのに、色が赤くなり日没になると何故悲劇的な場面に変わってしまうのか。このことについて、当時の文芸にヒントを求めると、宇佐美斉氏によれば十九世紀フランスの詩で「落日」ないし「夕暮れ」の表象は頻出するイメージであったという。[13] ユゴーなどのロマン派においては、自然の生命力への信頼を象徴するものとして表され、ボードレールやジュール・ラフォルグらでは「太陽」を「血まみれの心臓」と同一化する喩えが用いられていると宇佐美氏は指摘している。このような例え方が同時代の詩においてなされていたということは、先ほど挙げたルソーの密林画に描かれた日没のイメージを理解する上で参考になると思われる。つまり、自然本来の力を呼び覚ます日没の影響は、野生動物が本能に準じて狩猟を行なっている点にみることができる。また、《処女林の落日》と《ゴリラとインディオの戦う風景》に描かれている深紅色の日没は、「血まみれの心臓」という比喩が当てはまるように感じられないだろうか。ルソーの異国風景画に描かれた日没は、下界で繰り広げられる惨劇の不吉さを一層強めるモチーフとして使用されているように思われる。これらのことから、日没を月の表象と比較した際に推測できる違いは、月は動物の活動を静まり返らせるのに対し、赤々とした日没は動物の野性的な本能を奮い立たせる力をもたされているということだと考える。

## 三　同時代の人々が抱いた月のイメージ

ルソーの異国風景画の中で作家が描きだした「月の影響」は前述したとおりだが、同時代のフランスの人々も同様に月に対して神秘的なイメージを抱いていたのだろうか。当時の文化面からそれが分かる例を見ることは、ルソーが月に対して独特の発想を得るに至っ

た背景を考える上で参考になると思われる。ここからは、当時の文芸作品や科学雑誌などのメディアに、月がどのようなイメージとして描き出されているかについて、例をいくつか挙げてみたい。

はじめに当時の文学界における月の表象から見ていくと、見過ごすことのできない作品として、作家ジュール・ヴェルヌ（一八二八―一九〇五）が一八六五年に発表した『地球から月へ（月世界旅行）』（以下『月世界旅行』）と一八六九年に発表した『月を周って』が挙げられるだろう。作者のヴェルヌは、『地底旅行』（一八六四年）や『海底二万里』（一八六九―一八七〇年）などのSF作品を生み出したことで知られる人気作家で、ロマンあふれる冒険小説は大衆の心を大いに掴んだ。特に『月世界旅行』は、一九〇二年、ジョルジュ・メリエス（一八六一―一九三八）によって映画化もされており、ヴェルヌとこの作品の人気の高さが小説発表当時から長く続いていたことがよくわかる。科学的な好奇心のもとに月をメインテーマに据えたこと、そしてその作品が長く流行したことにここでは注目したい。

そして、月のモチーフからイメージを汲み取ることに関しては、詩の分野に例を探すことが有効であるように思われる。実際、当時活躍した詩人の作品では、月や月光がモチーフとして扱われた例が多数みられる。例えば、象徴派のポール・ヴェルレーヌ（一八四四―一八九六）が一八六九年に発表した詩集『艶かしきうたげ』には「月の光」という詩が収録されており、美しくも悲哀のある調子の作品となっている。[14] この詩は、一八八〇年代から一八九一年にかけて作曲家のフォーレとドビュッシーによって付曲され、広く知れ渡ることとなった。ヴェルレーヌには月光を扱った詩が他にもあり、一八七〇年の詩集『やさしい歌』には、「白き月かげ」という詩が収録されている。この詩は、白い月とその月光が射し込む森の情景を、愛する人への思いを込めて美しく詠った作品である。そして、彼らより時代は下るが、二十世紀の前半に活躍し、ルソーとも親しく交流を持った詩人、ギョーム・アポリネール（一八八〇―一九一九）が一九一三年に刊行した詩集『アルコール』の中にも月をテーマにした詩が収録されている。[15] 一九〇一年に作詩された「月光」という作品だが、月と月光に甘い蜜のイメージが重ね合わされ、甘美な雰囲気に満ちたものとなっている。以上に挙げた詩の例から分かるのは、月は十九世紀後半から二十世紀初めの頃の詩人の間で好まれて用いられていたモチーフの一つであったということと、彼らが月に投影したイメージは、物悲しさや、愛と美、耽美などそれぞれ違いはあるが、要約すると心的なロマンチスムであったといえる。

月は、前述のような小説や詩のほか、当時の科学雑誌などにおいても人々の好奇心を煽る対象として取り上げられた。科学技術が著しく発展を遂げた十九世紀後半の当時、天文学分野の研究もその一部として大いに推進されたのである。雑誌記事から一例を挙げると、一八九五年四月二十五日付の『好奇心―科学的オカルト』紙には「月の神秘」と題する記事があり、[16] 月の科学的説明とともに、逸話や星座との関係まで広く話題を提供する内容となっている。

以上で取り上げた小説、詩、雑誌の例のほかにももちろん、当時、

月がテーマとして扱われたものは沢山あるだろうが、ここではその一部を紹介し、月に対する大衆の好奇心や憧憬の様を確認した。本節で紹介した月についての各イメージをまとめると、ヴェルヌの小説では未知の世界である冒険の舞台として、雑誌では人々の好奇心をそそる科学的な対象として論じられており、この二例は謎を未だに多く含む天体に対する興味や好奇心が表れている点で共通しているといえる。一方、詩作においては、物悲しい感情または愛情、甘美的なイメージが投影される対象であり、闇夜を照らし、神秘性を感じさせるモチーフとして用いられている。作品のロマンチスムを表すのに便利な対象として多く利用されたのだろう。

ヴェルヌの小説に表れている未知なるものへの嗜好性は、ルソーの異国風景画にも通じるところで、密林という未知の世界の舞台設定から「月の影響」に至るまで一貫して明示されている。彼の都市近郊の風景画で描かれるエッフェル塔や気球、飛行機など最先端の科学技術の象徴に明らかなように、ルソーの作品には一般大衆の新鮮な驚きや好奇心が直接的に反映されている。そして、先に紹介した当時の詩作に表れているロマンチスムについては、ルソーも同様に、月を詩的な雰囲気を高めるものとして好んで作品に取り入れていたと考えられる。当時の人々が月に対して抱いた、神秘的な未知なるものへの憧憬は、《眠るジプシー女》から《夢》までの作家の異国風景画において、月がモチーフとして選択された背景に読み取ることができるだろう。

## 結

以上、ルソーの異国風景画を題材に、モチーフとして描かれた月について分析を行なった。そのまとめとしては、彼の作品に描かれた月は、作品単体として見るとさほど重要性があるように思われないかもしれないが、実は我々が思う以上に作品世界を成り立たせるうえで重要なモチーフであったと言えるだろう。それは、作家による作品解説に目を向けるだけではなく、複数の作品を比較して確認できることである。《眠るジプシー女》において明示された「月の影響」は、《蛇使い》や《夢》などの密林画においても示されていると推測でき、野生動物の闘争性を鎮め、密林を楽園と化す要素の一つとして用いられているのではないかと考えられる。また、弱肉強食の自然の厳しさを描いた作品では、月ではなく紅色の日没が「動物の本能を呼び覚ますもの」として代わりに用いられていたという点も、描かれた満月の性質を逆に特徴づけるものとして指摘できるだろう。ルソーの異国風景画は、闘いが繰り広げられる冷血な空間、もしくは人間も含めたすべての自然が調和する楽園として描かれているが、それらを見下ろすように空に浮かぶ満月ないし日没は、作家が野生の神秘に対して抱いた空想を考察する上で、ひとつの鍵となるように思われる。

## 註

(1) 作品制作にあたってのルソーの霊感源については、以下に詳しい。

Dora Vallier, *Henri Rousseau*, Paris, Flammarion, 1961; Eng. trans., 1964; impr. Italie., 1979; Yann le Pichon, *Le monde du Douanier Rousseau*, Paris, Robert Laffont, 1981 ; rev. Paris, CNRS Éditions, 2010; Henry Certigny, *Le Douanier Rousseau en son temps, Biographie et catalogue raisonné*, 2 vols., Tokyo, Bunkazai Kenkyujyo Co, Ltd., 1984.

(2) 《眠るジプシー女》について霊感源が議論された先行研究は以下の通り。Dora Vallier, *op.cit.*, 1964, pp.64-68; Albert Boime, "Jean-Léon Gérôme, Henri Rousseau's *Sleeping Gypsy* and the Academic Legacy", *The Art Quarterly*, Vol.34, no.1, 1971, pp.3-29; Henry Certigny, *op.cit.*, pp.280-286; Christopher Green, "Souvenirs of the Jardin des Plantes: Making the Exotic Strange Again", exh.cat., *Henri Rousseau: Jungles in Paris*, London, Tate Publishing, 2005, pp.29-47; Yann le Pichon, *op.cit.*, 2010, pp.222-225.

(3) 本論ではルソーの異国風景に描かれた月に焦点を絞ったが、以下の論ではパリ近郊の風景画から異国風景画まで、ルソーの作品に描かれた空について多面的に論じている。今井敬子「アンリ・ルソー：パリの空の下で　ルソーとその仲間たち」『アンリ・ルソー：パリの空の下で　ルソーとその仲間たち』展カタログ、公益財団法人ポーラ美術振興財団　ポーラ美術館、二〇一〇年、十六―二八頁。

(4) 本作の基本情報および来歴については、アンリ・セルティニ氏のカタログレゾネに則った。以下を参照。Henry Certigny, *op.cit.*, pp.280-286.

(5) 次より引用。岡谷公二『アンリ・ルソー楽園の謎』、東京、平凡社、二〇〇六年、一二四頁。該当の原文は次の通り。
«Une négresse errante, jouant de la mandoline ayant son jars à côté d'elle (vase contenant de l'eau pour boire) dort profondément harrassée de fatigue. Un lion passe par hasard, la flaire et ne la dévore pas. C'est un effet de lune, très poétique. La scène se passe dans un désert complètement aride. La bohémienne est vêtue à l'orientale. Je la laisserai de 2000 à 1800 francs parce que je serais heureux que la ville de Laval ait un souvenir de l'un de ses enfants.»
(Henry Certigny, *op.cit.*, p.281.)

(6) 原文は次の通り。
«Le félin, quoique féroce, hésite à s'élancer sur sa proie qui, harassée de fatigue, s'est profondément endormie.» (Henry Certigny, *Ibid.*, p.280.)

(7) *Ibid.*, p.281.

(8) 本論で挙げた作品についての参照元はすべてアンリ・セルティニ氏のカタログレゾネによる。また、作品の選出にあたっても同書に掲載の作品からのみとした。

(9) 一九〇四年に制作された《虎に襲われる斥候》（フィラデルフィア、バーンズ・コレクション蔵）においても、目を凝らすと空中の片隅に白く丸い天体が浮いているのに気づく。しかし、空は日中のように明るく、天体は空とほぼ同一化しているように見えるほど薄く描かれており、天体が月と太陽どちらを指し示すのか判別が難しい。よって、本論ではこの作品を除外して考察する。

(10) 月と音楽との組み合わせについては、ルソーが一九〇四年に発表したワルツ「クレマンス」においても指摘でき、楽譜の表紙には大きな三日月型の景色を背景にして、紙を手にしたピエロが手前に描かれている。この表紙の絵はルソーの作ではなく、作者が何者なのか、何故この図柄が選択されるに至ったのかについては不明である。表紙の図柄についてルソーの意見が反映されているのかについても不明だが、彼の初期作品《カーニヴァルの夜》（一八八六年、フィラデルフィア美術館蔵）には月とピエロのモチーフが描かれているという共通点がある。ワルツ「クレマンス」については、以下を参照。遠藤望「アンリ・ルソーと音楽―《ワ

ルツ「クレマンス」』を巡って」、『世田谷美術館紀要』第十五号、二〇一四年、十六―二五頁。

(11) 岡谷公二、前掲書、二六五頁。該当の原文は次の通り。

«Yadwigha dans un beau rêve S'étant endormie doucement, Entendait les sons d'une musette D'un charmeur bien pensant. Pendant que la lune reflète Sur les fleurs, les arbres verdoyants, Les fauves et autres animaux prêtent l'oreille Aux sons gais de l'instrument.» (Henry Certigny, *op.cit.*, p.652.)

(12) 岡谷公二訳、前掲書、一六九頁。原文は次の通り。

«Le lion, ayant faim, se jette sur l'Antilope, la dévore, la panthère attend avec anxiété le moment où, elle aussi, pourra en avoir sa part. Des oiseaux carnivores ont déchiqueté chacun un morceau de chair de dessus le pauvre animal versant un pleur ! Soleil couchant.» (Henry Certigny, *op.cit.*, p.308.)

(13) 宇佐美斉「[特別講演] フランス近代詩と落日」、『仏文研究20』、京都大学文学部フランス語学フランス文学研究室、一九八九年、一五三―一六三頁。

(14) ヴェルレーヌに関しては、以下を参照。堀口大學訳『ヴェルレーヌ詩集』(『世界の詩 2』)、彌生書房、一九六三年。

(15) 以下を参照。松村剛訳「月光」、鈴木信太郎、渡邊一民編『アポリネール全集』、紀伊國屋書店、一九六四年、三六三頁。

(16) *La Curiosité : journal de l'occultisme scientifique*, 24 avril 1895, pp.4-5.

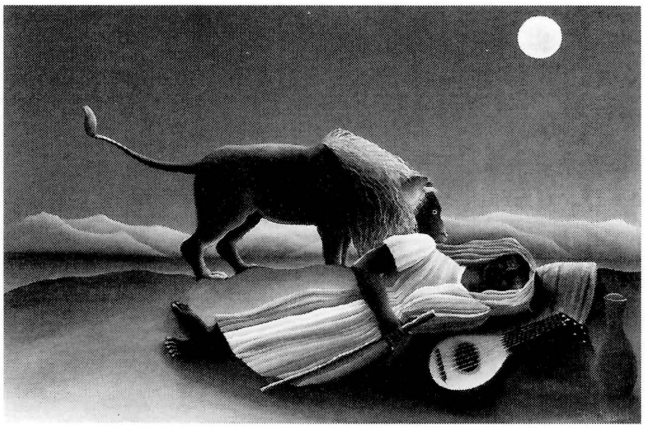

図１ 《眠るジプシー女》1897 年、ニューヨーク近代美術館蔵

図３ 《飢えたライオン》1898/1905 年、バーゼル、バイエラー財団蔵

図２ 《不意打ち！》1891 年、ロンドン、ナショナル・ギャラリー蔵

図5《蛇使い》1907年、オルセー美術館蔵

図4 《ライオンのいるジャングル》1904年、箱根、ポーラ美術館蔵

図7 《夢》1910年、ニューヨーク近代美術館蔵

図6 《エデンの園のエヴァ》1906-1910年頃、箱根、ポーラ美術館蔵

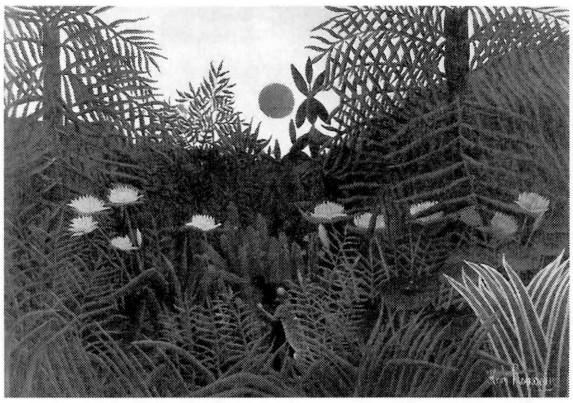

図 9 《処女林の落日》1910 年、バーゼル市立美術館蔵

図 8 《異国風景》1908 年、個人蔵

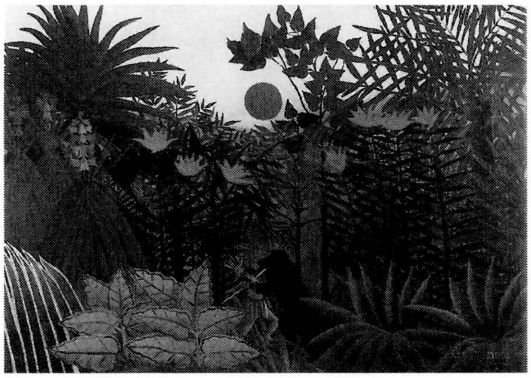

図 10 《ゴリラとインディオの戦う風景》1910 年、
ヴァージニア美術館蔵

## 図版出典

図　1：Werner Schmalenbach, *Henri Rousseau: Dreams of the Jungle*, Munich・London・New York, Prestel Verlag, 2000.

図 2・7・8・10：Jean-Jacques Lévêque, *Henri Rousseau*, Paris, ACR Edition, 2006.

図 3・5・9：Isabelle Cahn, *Le Douanier Rousseau : naïf ou moderne ?*, Paris, Éditions À PROPOS, 2006.

図 4・6：『アンリ・ルソー：パリの空の下で　ルソーとその仲間たち』展カタログ、公益財団法人ポーラ美術振興財団　ポーラ美術館、二〇一〇年。


橋本恵里（はしもと・えり）

二〇一五年　宇都宮大学国際学部卒業

二〇一七年　神戸大学大学院人文学研究科博士前期課程修了

二〇一七年―　福島県立美術館学芸員